

## 放送大学大学院修士課程体験記

社会経営科学プログラム（2023 年度修了）

中石昭夫

### 1. 応募の動機

二つある。一つ目は、2020 年 6 月に勤務先の職務が大きく変わったことによる。未経験の業務（監査役）の勉強を進める中で、この機会にコーポレートガバナンスに関する実証的な研究を行い、成果を纏めたいと考えた。二つ目は、コロナ禍で在宅勤務が増え時間的な余裕が生じたことである。仕事と研究の両立から通信制大学院を検討した。「Open Forum」で興味深い研究を見つけたことが決め手となり、本学を選択した。

### 2. 準備

2022 年度全科生入学を目標に 2021 年の春頃から準備を進めた。ポイントは 2 点ある。まずは試験（選考）への備えである。数冊の市販書を参考に時間をかけて研究計画を作成した。筆記試験に向けては、3 年分の過去問からおおよその出題傾向を把握した。英語対策は、3 年分の外交青書の英和比較を行い、文脈に沿った適切な訳語を覚えた。一次試験の「経営学」問題で、仕事で日常的に議論しているテーマが出題され一瞬目を疑った。これは実に幸運であった。

もう一つは全科生入学前の単位取得である。私の場合、2021 年度 2 学期に 19 単位を取得し、2022 年 4 月からの研究と論文執筆に時間配分する作戦を採った。

### 3. ゼミ

原則、月初めの日曜日午後の開催でほぼオンラインであった。2 ヶ月に 1 回、一人約 1 時間の発表の機会があるが、研究の進め方や論文構成で質問や迷いがある場合は、指導教授に申し出て、このペース以上の発表を認めて頂いた。ゼミには様々な職歴、年齢や研究の動機をお持ちの方々が参加する。技術系バックグラウンドの方も珍しくない。研究テーマ選択の理由や方法論は実に多岐にわたる。初回ゼミで新生は研究アイデアを紹介するのだが、そのようなテーマがあるのかと、その着眼点に驚いたことを覚えている。指導教授の助言や他のゼミ生のコメント等のおかげで、研究の軌道修正や視野を広げることもできた。強制ではない自主的な学びと気づきの場であるとともに、知的好奇心を刺激される機会である。毎回のゼミが待ち遠しいほどであった。

### 4. 研究と論文執筆

論文タイトルは「会計不正企業の対外発信行動と経営者の関与-上位階層理論

に基づく分析-」とした。有価証券報告書のテキスト情報と企業の財務データの相関分析に加えて事例の定性的考察を行い、経営者による会計不正の実態を検証したものである。ここに辿り着くまでは紆余曲折があった。「問い」が明確でないまま、テキストマイニングや回帰分析に没頭し、実質的な研究の進展につながらない時期があった。空走である。さらに、研究の意味や意義をどう主張するか、自問自答が続く。先行研究に関する内外の論文を相当読み込んだが、論文提出直前に偶然、重要な文献を発見し、どう取り込むかかなり難渋した。もっとも、締め切りのある仕事をしてきた社会人には、予想外の出来事への対応や、納期内の仕事の完成は馴染みのあることだろう。なお、放送大学の修士論文提出は12月であるため、年末年始での追い込みを前提にはできないことに留意が必要である。

#### 5. 修士（学術）の学位以外に得られたもの

リカレント教育と言われ、社会人の学び直しが推奨されている。社会人の強みの一つは、実務経験に裏付けられた実践力であろう。一方で、アカデミアには、事象を俯瞰的に理解するための学術的な知識が豊富に存在する。この二つの領域を行き来することで、事象の本質を理解するための知識と新たな視座を獲得できると考える。個人的経験を過度に一般化することなく、自身の認知バイアスから多少は自由になるかもしれない。ここに、社会人による学術的な研究の意義を見出せるのではないかと気づいた。放送大学大学院修士課程2年間のもう一つの大きな収穫である。